

ま、気持ちが分からないわけではない。嘘をつくには、それなりの理由もある。が、昔は、嘘をつくと閻魔さまに舌を抜かれると教えられたはずだ。

80歳のYさん。まだ現役の商売人で、「車を運転できないと、仕事にならない」と繰り返す。実は、運転免許更新の際に受けた認知機能検査で不合格になり、医師の診断書が必要になったのだ。認知症と診断されれば、公安委員会で免許更新が拒否される。

だから、Yさんは真剣である。記憶力低下は明らかで、Yさん自身、もの忘れを自覚しているはずだが、が、「そりゃあ、年並にね」などと、とぼけている。頭のMRI（磁気共鳴画像装置）の検査では、年齢以上の海馬の萎縮がみられる。アルツハイマー型認知症が疑わしい。

で、探し物や失くしたものはないか？とか、仕事のミスはないか？薬ののみ忘れは？などと、こまごまと日常生活のありしを尋ねるのだが、「異常はない」「と即座に答える。同伴した奥さんも口裏を合わせるとか、「へんな所はない」の一点張りなのである。

真つ赤な嘘だろう、と知っている。だが、家族までも日常生活に支障がないと言われれば、診断書に認知症とは書けないではないか。で、軽度認知障害とすれば、Yさんは半年間は車の運転が許されるのだ。それで良いのだろうか？

もの忘れのない高齢者でも、周囲の変化に対する脳内の処理速度が遅くなり、反応も遅くなるので交通事故を起こしやすいという。人生100年時代とはいえ、いつまでも危険なことは許されまい。だから、Yさんには、これを機会に、車の要らないライフスタイルを模索してもらいたい。

なーんて、言うべきか？医師というものは、自分はさておいて、患者さんに嘘をつかせ、そのうえ生き方にまで口出しをする。イヤな仕事だ。

(石黒修三iiiクリニック・脳神経

外科専門医・4/4北國新聞掲載)